

Editor's Note

講評

今年度は、卒業論文を提出する資格を有する学生数は2名でしたが、残念ながら、結局、1編も提出されませんでした。卒業論文がゼロとなったのは、ボクが専修大学に入職した1979年（昭和54年）以来、教師生活35年目にして初めての経験となりました。

これまで、他の先生がたまたま卒論ゼロである時には、傍から見て、何となく羨ましいような気持ちを抱いていました。採点や評価などの仕事から免れられるので、ラッキーかしら、というような浅ましい考え方だったと思います。しかし、実際に我が身がその状況に置かれると、その心中はとも言葉には言い表せない複雑なものがありました。乏しい語彙力でもって、敢えて表現を試みるとすれば、心の中を風が吹き抜ける感じですが、しかし、風が吹き抜けているくせに、笑おうと思っても、十分な量の空気が肺から上がって来ず、曖昧で弱々しい笑い表出ししかできない、そんな感じでした。頭に浮かんだ漢字の表現としては、後悔、自責、指導力不足、無力感、寂寞、脱力などなどでしょうか。とてもラッキーなどというものではありません。先輩の先生方に対して何て失敬な思いを抱いていたのかと思いついたときに恥ずかしく、思わず赤面するのを止めることができません。

そんな中、3年生の内の3人が研究法論文を提出してくれました。1年間の授業の中でもこの三人衆は悩みながらも、よく努力し頑張っていたと思いますが、1年間の総決算となる取りまとめの論文もなかなか良いものになりました。

石田雅さんは、近年、日本社会において犬やネコなどのペットが、ペットの動物としてではなく、人間の子どものように扱われる風潮に着目しながら、一方、人間の子どもの親から人間として扱われるのではなくて、まるで動物のペットのように扱われているという傾向を捉え、この両方の現象を一つの観点から理解するための研究を始めました。研究法論文では、テキストマイニングと文章完成法によって、この二つの現象を統合的に検討可能な研究概念の探索ならびに仮説の種になる枠組みの探索を行いました。卒業研究では、ここで得られた結果を活かして、より定量的なモデル定立に取り組むことになると期待されます。

登坂美咲さんは、人前でスピーチを求められた時などのいわゆる“あがり”の現象について、それに影響を及ぼす内外の要因を検討するだけにとどまらず、その“あがり”を防止し低減させるためにはどのようなことが有効であるかを考え続けて来ました。自らの生活に源を持つ研究興味だったため、大きな揺らぎ無く論文完成まで辿り着いたと思います。研究法論文では、筋弛緩法に着目してその効果を検討しています。まだ例数が少なく、断定的な結論を得るには至ってはいませんが、従来のスピーチ研究には無い知見と、また従来の筋弛緩法研究では看過されていた観点が見え始めている点、今後の研究の展開が期待されます。

横山健介くんは、保育園での実習の経験に基づき、園児の遊び、特に遊びの場所の特性が園児の社会的行動の現れ方や、遊びの発達・構造化のされ方に関連しているという点に注目し、行動観察によって探索的にデータを収集しました。まだ観察例数が少なく、適用できる統計的な解析手法も限られています。観察カテゴリーシステムを改良しながら、卒論に向けて観察例数を増加させていけば、保育園や幼稚園の園庭のどのような特性が子どもの行動発達にどのように影響を与えるかについて新しい知見が得られる可能性があります。このテーマに関連する論文は残念ながら、邦文のものが少ないので、今後は論文収集の対象を非日本語論文にも拡大して最新の研究をフォローすることを目指してください。

なお、今年の3月末になって、石橋康弘くん、吉村健太郎くん、そして東本綾乃さんが退学の手続きを取りました。理由と動機は三人三様ですが、三人のこの先の人生が実り多いものとなるよう祈っています。

（2015年3月15日 山上 精次）